

特急「たざわ」田沢湖・角館殺意の旅

新庄雄太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

南は、歩夢としずくと侑と一緒に東北新幹線「やまびこ」と特急「たざわ」に乗り次いで田沢湖と角館へ向かった、ところが田沢湖で女性の水死体が発見された。

東京―秋田を舞台に特捜班は謎を追う！

特急「たざわ」 運転開始40周年記念作品

目次

第1章	田沢湖で水死体	1
第2章	城下町・みちのく角館へ	4
第3章	失踪人搜索願	6
第4章	鉄壁のアリバイ	9
第5章	歩夢と侑の推理	12
第6章	事件解決	16

第1章 田沢湖で水死体

秋風にのせて、南は歩夢と侑としずくと一緒に東京発8時00分の東北新幹線「やまびこ」に乗っていた。

「秋の東北も楽しみですね。」

「うん、せつ菜ちゃんも来ればよかったのにね。」

「昨日から風邪をひくなんて。」

「そうだよね。」

「秋の東北の旅は、田沢湖と角館なんだよね。」

「うん、「やまびこ」と「たざわ」で行くと3時間22分だよ。」

「へえー。」

「東北新幹線って、結構便利になったのね。」

「そうだよ。」

10時36分、新幹線「やまびこ1号」は定刻通り、盛岡へ到着した。

「やつと、盛岡か。」

「そこからは、特急に乗り換えよ。」

「わーい。」

そう言つて、特急「たざわ」が停車していた。

「じゃあ、乗ろうか。」

「うん。」

フーン！

10時48分、南と歩夢達が乗った特急「たざわ5号」は盛岡を发车した。

東北新幹線が大宮〜盛岡間で開業した年、1982年の11月に盛岡〜秋田・青森のL特急として急行格上げで登場した。ヘッドマークには、田沢湖が描かれておりひらがなで「たざわ」と書かれてあり、辰子像が描かれている。歩夢達が乗った特急「たざわ5号」は10時48分に発車し、雫石、田沢湖、角館、大曲、終着秋田へは12時34分に到着する。

「単線になってるね。」

「本当だわ。」

と、歩夢と侑は車窓を眺めていた。

「新幹線で行くと、3時間で行けるなんて。」

「本当だよ。」

11時28分、特急「たざわ5号」は田沢湖に到着した。

「うわー、美しいわ。」

「本当だわ。」

「ねえ、写真撮らない。」

「うん、いいわね。」

そう言って、しずくはカメラで歩夢と侑の田沢湖の辰子像で記念撮影した。

「ん、何あれ。」

「どうしたの、侑ちゃん。」

「えっ、何これ。」

キヤーツ！

と、歩夢と侑は叫んだ。

「どうした。」

「ん、何だあれは。」

近づいてみると、それは何と女性の水死体でした。

暫くして、秋田県警のパトカーが到着した。

「で、あなたが第一発見者ですね。」

「はい、私は上原歩夢です。」

「そして、私は幼馴染の高咲 侑です。」

「私が写真を撮っていた時に、死体を発見したんです。」

「ほう、なるほど。」

そして、部下の野上刑事は言った。

「警部、被害者の身元が分かりました。」

「おう、本当か。」

「はい、被害者は東京在住の二長節子さん23歳です。」

「それで、死因は。」

「恐らく溺死でしょう。」

そして、南は言った。

「彼女、どうして田沢湖へ行っただんですかね。」

「うん、私はそう考えると。」

「その女は自殺するのかな?。」

と、しずくは言った。

カシヤツ。

と、記念撮影をした。

第2章 城下町・みちのく角館へ

そして、みちのく角館を訪問した。

「ここが、みちのくの城下町ね。」

「ええ。」

深い木立と重厚な屋敷構えが今もなお藩政時代の面影を残す町、角館。東北の小京都と呼ぶのにふさわしい風情を、町全体に漂わせた桜の名所です。この町は1620年（元和6年）角館地方を治めていた芦名義勝によって造られました。豊かな仙北平野の北部に位置し、三方を山々に囲まれ、西は桧木内川、南は玉川に沿った地形で、城下町を形成するのに最も適した場所でもありました。

角館の町並み

城下の縄張り（設計）として最も注目されるのは、南北に延びる町の中央に土塁を築いた「火除け」を設け、武家居住区の「内町」と町人居住区「外町」とに分断したことです。武家屋敷は生活の場所であると同時に、ひとつの城郭を成していると言えるでしょう。古城山麓の国道46号から火除け前までの通称「武家屋敷通り」と呼ばれる区域が、昭和51年9月、重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

「結構、昔からあるのね。」

「うん。」

そして、角館を観光した後は乳頭温泉で1泊することにした。

「今日は、温泉で泊まって行くこうか。」

「いいわね。」

乳頭温泉

「ハーツ、いい湯だわ。」

「やっぱり、東北へ来たたら寄って行きたい温泉だから。」

「やっぱり、東京から東北へ行くのは東北新幹線で行かないとね。」

「うん、私も一度乗って見たかったのよ。」

「侑ちゃんもそう思う。」

「うん。」

「侑ちゃん、誘ってくれてありがとう。」

「いいのよ。」

「でも、せつ菜ちゃんも行きたかったかな?。」

「そうね。」

一方、特捜班では。

「へえー、東北か。」

「うん、東京から東北新幹線「やまびこ」に乗って盛岡から特急「たぎわ」に乗り換えて田沢湖と角館へ行くんだそうだ。」

「東北新幹線「やまびこ」。」

「うん、今度個室を連結したそうだ。」

「へえー、いいな。」

「私も乗って見たいなあ。」

と、小海は言う。

「うん、この東北新幹線には「ソワニエ」と言う乗務員が乗ってるんだ。」

「凄いのね、東北新幹線って。」

「うん、盛岡から秋田へ行くにはどうするんだ。」

「盛岡からは特急「たぎわ」に乗って行くんだよ。」

「へえー、特急「たぎわ」か。」

「結構人気なんだよね。」

「そうだよ。」

「今頃、南主任も楽しんでるみたいだな。」

「ええ。」

「秋田と言えば、乳頭温泉だよ。」

「温泉か、いいわね。」

と、そこへ高杉班長がやって来た。

「おい、何ぼーつとしてるんだ、さっさと仕事に取り掛からんか。」

「はい、班長。」

と、高山達は仕事にとりかかった。

第3章 失踪人搜索願

「皆、おはよう。」

「おう、どうだった休暇は。」

「おう、楽しかったよ。」

そして、南は皆にお土産を渡した。

「へえー、田沢湖か。」

「そこは確か、辰子像で有名なのよね。」

「そうだよ。」

そこへ、1本の電話が入った。

「はい、公安特捜班、えつ、身元照会、肺、わかりました、早速調査いたします。」

高杉は電話を切り、南と高山に言った。

「おい、秋田県警から捜査協力の要請だ。」

「早速、高山と当たって見ます。」

早速、調査に当たった。

「なるほど、すると二長節子は東北新幹線「やまびこ」に乗って行方が分からなくなったって訳ですね。」

「はい、何度も電話したんですけど、中々でなくて、それで心配になりました。」

「実はですね、田沢湖で二長節子の死体が発見されたんです。」

高山は、二長に言った。

「えつ、節子が。」

「はい、今秋田県警が捜査をしています。」

「きつと、誰かに殺されたんだわ。」

と、美弥香が言った。

「誰って、その人誰なの。」

「それは、その。」

「はっ。」

「でも、節子は自殺なんかしないわっ。」

「なるほどそうですか、わかりました早速我々で捜査してみましょ

う。」

「はい、お願いします。」

美弥香は南と高山に言った。

「何、二長は3日前に行方不明になっていた。」

「はい、所轄の刑事の話だと彼女は上野から東北新幹線に乗って何処かへ行ったらしいんです。」

「なるほど、つまり二長は上野から東北新幹線に乗って盛岡から、特急に乗って行ったって事も考えられるな。」

「ええ、彼女の足取りは分りました。」

「おお、本当か。」

「はい、彼女は上野から東北新幹線に乗っていますね。」

と、調べて見ると。

上野発6時06分 東北新幹線「やまびこ31号」に乗車

盛岡着9時28分 下車

盛岡発9時39分 特急「たざわ3号」に乗車

田沢湖着10時09分 下車

そして、二長は田沢湖で殺害される。

「なるほど、つまり彼女は田沢湖で死んでいたって事ね。」

と、小海は言った。

「そう言う事になりそうだな。」

「ええ。」

「そうか、彼女は上野から盛岡で新幹線に乗って、盛岡から田沢湖へは特急「たざわ」に乗って失踪したって事か。」

「ええ、可能性があります。」

「問題は、犯人は誰かって事だな。」

「後、犯行の動機だよね。」

「うん。」

「失踪した当日のアリバイを調べておけば。」

「そして、事件は解決。」

と、高山は言った。

「よし、その線で捜査してみようか。」

「はい。」

「秋田県警にも、捜査協力を要請しておこう。」
と、高杉は言った。

第4章 鉄壁のアリバイ

「何なんだ、アンタは。」

「すいません、鉄道公安隊の物ですが。」

「実はですね、二長節子について話を聞きたいんですが。」

「節子が、どうかしたのか。」

「田沢湖で死体で発見されたんです。」

「えっ、あいつが死んだ。」

「ええ、田沢湖でね。」

そして、桜井と岩泉はその男に話を聞くことにした。

男の名前は、中川 哲也。

「えっ、俺のアリバイですか。」

「ええ、事件の関係者に色々聞いているんです。」

「おう、その事件の当日か。」

「俺はその時は、東北新幹線に乗って盛岡から特急に乗って秋田へ行つて、そこからみちのく角館へ行つて、そこから函館へ行きましたよ。」

「函館ですか。」

「青森から、特急「はつかり」に乗って行ったから間違いないよ。」

「それ、本当ですか。」

「ええ。」

「なるほど。」

高杉は、桜井と岩泉の報告を聞いていた。

「何、秋田から函館へ行っていたのか。」

「はい。」

「話によると、中川は函館の友人と彼女に会いに行っていたという事です。」

「裏付けしてくれたのか。」

「はい、彼にはアリバイがありました。」

「そうか。」

「友人と彼女にも確認取れました。」

「そうか、アリバイ成立か。」

「はい。」

「そうだな、彼には彼女を殺す動機がないな。」

「ええ、中川には不可能です。」

「そうだろうな。」

その頃、南は高山と小海と一緒に早速東北新幹線に乗って田沢湖へ行けるのか犯行を推理してみた。

「と言う事は、二長は東北新幹線に乗って田沢湖へ行ったんだよね。」

「そうだ。」

「じゃあ、それに乗って調べるって事か。」

「ええ。」

「早速、新幹線と特急に乗って田沢湖へ行ってみましょうか。」

「ええ。」

午前8時00分、南と高山と小海は東北新幹線「やまびこ1号」に乗って盛岡へ向かった。盛岡へ到着したのは10時36分、10時48分盛岡駅で特急「たざわ5号」に乗って田沢湖へ向かった。田沢湖へ到着したのは11時28分である。

「と言う事は、田沢湖へ行く時は生きていたって事になるわ。」

「つまり、犯人は東京駅で毒入りの紅茶を飲み、飲んだ後に湖で落ち、死亡した。」

「そうか、犯人はこれを利用したんですね。」

「その通りだよ、高山。」

「じゃあ、すぐに班長に報告しておきましょう。」

「そうだな。」

そして、南と高山達は特急「たざわ」と東北新幹線「やまびこ」に乗り次いで東京へ戻った。

「何、殺人トリックが分かった。」

「ええ、被害者は東京駅で誰かに毒入りの紅茶を渡して、田沢湖で死んだんですよ。」

「そうか、犯人はこれを利用したのか。」

「はい。」

そして、犯人が使った殺人トリックが解けた。

第5章 歩夢と侑の推理

この事件の推理は、歩夢と侑が推理をすることにした。

「犯人は、その女と付き合っていたわよね。」

「うん、噂を聞いたけど。」

「その男が、田沢湖の事件と関係しているのかな。」

「歩夢。」

「何、侑ちゃん。」

「あまり考えたくないんだけど、もしかしたら浮気しているって事は。」

「えっ、まさか、侑ちゃん冗談でしょ。」

「そのまさかよ。」

「なるほどね。」

そこへ、南がやって来た。

「おや、歩夢ちゃんと侑ちゃん。」

「あっ、南さん。」

「田沢湖で起きた事件の事だけど、溺死にしてはちよつと疑問に思ったの。」

「えっ、それ本当か。」

「誰かに毒を混入して、それを飲んで田沢湖で死んだんじゃないかな？。」

「ほう、なるほど。」

「でしょ。」

「うん、確かにそうだ。」

「問題は、犯人は誰かって事ですよね。」

「そこなんだよな。」

そして、高山が駅のホームで聞き込みをして見たが。

「えっ、白いコートとサングラスをかけた男を目撃した。」

「ええ、東北新幹線のホームでか。」

「はい、女と一緒に新幹線に乗る所を目撃しましてね。」

「なるほど、それで年齢は分りますか。」

「そうだな、年齢は32歳ぐらいの男だったな。」

高山は高杉に報告した。

「何、32歳ぐらいの男が二長に会っていた。」

「はい、目撃者の話ではサングラスとコートを着ていたが年齢は32歳ぐらいの男と言っていました。」

「と言う事は、その男が怪しいって事か。」

「はい、その可能性があります。」

「よし、その線で捜査してみようか。」

「それから、2人の女の子から情報提供です。」

「何、田沢湖で起きた水死体は犯人に毒殺直後に死亡したと考えられるんです。」

「そうか、その方法も考えられるな。」

と、高杉は言った。

「その男を追ってくれ。」

高杉は、直ちに秋田県警に連絡した。

「なるほど、すると毒殺直後に田沢湖で溺死したって事か。」

「はい、東京駅で毒入りの紅茶を渡したと思われます。」

「そうか、犯人はそれを利用したのか。」

「そうです。」

「わかりました、早速この線で捜査してみます。」

と、電話を切った。

「もしかしたら、彼女も推理したそうだな。」

「この2人にも1本取られましたな。」

と、菅原は言った。

「まさに、女探偵だな。」

「ええっ」

高山は札沼にその男に気を付けてと注意した。

「白いコートとサングラスをかけた30代ぐらいの男に会ったら注意してくれ、見つけたら知らせしてくれ。」

「わかったわ、高山君。」

と、言って札沼はこの日東北新幹線で車内販売の日だった。

第6章 事件解決

「犯人は、羽越本線経由の寝台特急に乗って秋田へ行ったんだよ。」
「なるほど。」

「犯人はそれを利用したのね。」

と、時刻表で調べて見ると。

寝台特急「出羽」

上野発23時03分 乗車

秋田着8時14分 下車

特急「たざわ10号」

秋田発10時10分 乗車

田沢湖着11時15分 下車

そして、田沢湖で女性に会い、田沢湖で殺害した。

「そうか、犯人はこれを利用したんだ。」

「問題は、犯行の動機だよね。」

「ええ。」

「ああ、犯人の身元が分かったよ。」

「えっ、班長、それ本当ですか。」

「ああ、犯人はこの男だ。」

「誰なんです。」

「名前は、芦川 健治だ。」

「そうか、や派の彼女を殺して財産を狙っていたって事か。」

「そうだ。」

「つまり、犯人は芦川と見て考えてもいいですね。」

「うん。」

そして、札幌は東北新幹線「やまびこ」に乗って車内販売をしていた。

「すみません、コーヒー下さい。」

「はい、どうぞ。」

「はい、お金。」

「毎度、ありがとうございます。」

と、その時だった。

「えー、お茶とお菓子とお弁当はいかがですか。」

と、札沼は何かを発見したのか。」

「ん、あれ、この人。」

何と、札沼は1人の男を発見した。

「あれ、この人。」

「すみません、これをください。」

「はい、ビールとつまみですね。」

「はいよ。」

と、男は札沼にお金を払った。

「毎度、ありがとうございます。」

札沼は、車掌に言った。

「あつ、車掌。」

「どうした、札沼さん。」

「今、サングラスをかけた男が乗っているんですけど、容疑者の男に似ているんです。」

「えっ、それ本当ですか。」

「ええ、その男に似ているんです。」

「わかりました、声を掛けて見ます。」

そこへ、車掌が男に声を掛けた。

「あのー、すみませんがちよつとお話を聞きたいのですが。」

と、芦川がその場で逃げ去って行った。

芦川は、終着盛岡で下車した。

「ちよつと、待ちなさい。」

「くそー、捕まってたまるか。」

そこへ、高山と桜井と岩泉が追いかけてきた。

「逃がさないわよ。」

「観念しな。」

高山は、芦川に手錠をかけた。

そして、翌日。

「いやー、歩夢ちゃんと侑ちゃんとしずくちゃんの推理のおかげで事件は解決したよ、ありがとう、ご協力感謝するよ。」

と、高杉班長は言った。

「いやー、私はそれほどでも。」

「それに、お手柄でしたな。」

「ええ。」

「今度、演劇でやってみようかな。」

「それいいかもな。」

と、高山は言った。

「しかし、あの芦川もなんて男なんだろう。」

「財産による犯行だったそうだ。」

「へえー、なるほどね。」